

孫に語る歴史

第7章 近世後期

谷川 修

第7章 近世後期

7.1 西洋の発展と啓蒙、西南アジアの苦境

A. 西洋の発展と啓蒙

前章で、1600年代中頃までに、西ヨーロッパの全体的な体制ができあがったことを見た。各国で、王の宮廷が中央政府としての形を整え、国の徴税制度ができていく。官僚制度もしだいに組み立てられていく。身分制が残っているが、社会の発展に応じた新しい政治体制が諸国にできて、王の統治するまとまった国家が互いに競争する状態へ進む。

東ヨーロッパでは、封建的な体制が遅くまで力を持ち、農民は領主に強くしぼられた状態が続く。商業も手工業も西ヨーロッパほどさかんではない。王たちは、進んだ西ヨーロッパを見習いながら、強い国をめざして領土の拡大に向かう。そこでは国境が変わっていく。

西ヨーロッパでは、農村に自立的な農民が増えていた。手工業に従事する者が出て、農産物や製品の商取引もさかんになる。都市でも農村でも、規模の大きな手工業が増えていく。毛織物業を例にとれば、問屋として何人もの織り子に仕事をさせる者、さらに、多くのはたおり機を置いた工場で雇った人々に仕事をさせる者も出る。仕事のやり方が分業的になった工場をマニュファクチュアという。都市では、さまざまな職人の同業組合が栄え、

商業や金融業が発展した。こうして、領主層に加え、商業や事業で財産をなした人々が力をもつようになっていく。中産階級という言葉は、もともと封建領主層につぐ人々を意味している。新しく登場したそれらの人々が、社会で重要な役割を果たすようになる。

イギリス：民主政と経済の進展

あの人は紳士だとほめられるのは名誉なことだ。中国の郷紳などをさす言葉である。イギリスの gentleman は、爵位をもつ貴族とその下のジェントリから成る領主層をさす言葉であった。近世になると農業経営に変化が起きた。穀物や家畜の増産が進み、毛織物業のための羊毛の生産がさかんになる。自営農民からも地主が出て、ジェントリ層に加わっていく。事業で成功した人々も力を増していく。これらの人々は、議会に代表を送り出していた。他方で、王の宮廷は常備軍をもたず、地方行政の組織もなくジェントリがその役割を担当していた。

1628 年、臨時課税などで王と対立した議会は、マグナ・カルタ(大憲章)以来の権利を保つために、「権利の請願」を提出する。王は、議会を解散して対抗したが、1640 年、戦費を集める必要から議会を招集すると、議会は王権を制限する議決をして改革を進めた。

まもなく、議会派と国王派に分かれて内戦が起きた。カルヴァン派の新教徒は、イギリス国教会の主流派ではなく、ピューリタンと呼ばれていた。情勢の流動化した

内乱で、クロムウェルに指導されたピューリタンが、強い軍隊を結成して議会派の主導権をにぎった。1649年、国王を公開処刑して共和制に進む。ピューリタン革命という。王権を倒したクロムウェルの政権は、イギリスの利益を拡大することに努める。アイルランドに出兵し、そこの領主から土地を奪っていく。航海法という法令を出して、貿易でのイギリス人の利益を図る。それは、オランダとの戦争に発展した。

クロムウェルが死ぬと、1660年王政にもどされる。さらに二度、強国のオランダと戦争した。まだイギリスが優勢にはならないが、植民地拡大への道を歩み始める。北アメリカ東海岸のニュー・アムステルダムを手に入れた。今のニュー・ヨークだ。ところが、ステュアート朝の王は昔ながらの政治をしようとする。

次の王はカトリック教徒で、議会と対立してまた政治的な危機が生じた。1688年、議会は一致して、オランダの首長であるオラニエ公ウィレムに武力援助を求めた。母が王の姉で、妃は王の娘である。つまり王位継承権のある人物だ。結局、王はフランスへ亡命する。翌年、ウィレム(ウィリアム3世)と妃は、議会の求める古来の権利を認め、共同統治する王位についた。議会の要求する条項は正式な法になった。「権利の章典」と呼ばれている。イギリスに、王がいるけれども議会の制定する法が優越するという、議会政治が生まれた。イギリス人は、王の血が流れなかったこの革命を、名誉革命と呼んでいる。

女王の妹が王位を継いだが、また子がなく、ステュアート家の血筋で新教徒の、ドイツのハノーファー侯を王にした。律儀に血縁の者が王位を継ぐのだ。その間に、ウェールズを含むイングランド王国はスコットランド王国と合同して、一つの王国になった。議会も統一された。グレート・ブリテン王国という。二つの革命を経たイギリスは国力を増していく。領主層や地主層を中心に大商人などの加わる紳士と呼ばれる人々が主導する国である。アイルランドの土地の獲得はさらに進み、海外の植民地からの収入も増やした。国内の産業が発展していくのと並行して、議会政治が進展する。1721年には、議院内閣制が成立する。議会の下院で多数派を形成する政党が政権を運営するのだ。「国王は君臨すれども統治せず」というイギリスの民主政治が始まった。

1700年代、インドでガンジス川下流域に支配権を得た。北米東海岸では、フランスと領土の奪い合いになった。現地の数度の戦争で、フランス人よりも多く入植していたイギリス人の方が勝つ。カナダやミシシッピー川の東側を奪って、北米東海岸はイギリス領となった。

1700年代中頃以後、ヨーロッパ、西アフリカ、西インド諸島・北米の三角貿易で、イギリスをはじめとするヨーロッパは大きな利益をあげた。ヨーロッパの武器などを西アフリカへ、そこからアフリカ人の奴隷をアメリカへ運び、こんどはアメリカで生産される砂糖や綿などをヨーロッパへ運ぶのである。アメリカでは、アフリカ人

奴隸を使って、大農場で砂糖や綿を生産した。イギリスは、北米の農場から送られる綿で綿織物を生産し利益をあげた。それらの利益は、イギリスの産業の元手(資本)になって、次代の産業を発展させる。ヨーロッパ大陸の諸国が互いに戦争をしていた1600-1700年代、イギリスは海外に目を向けながら、自国の繁栄に励んだ。1700年代中頃から、イギリスが世界システムの中心になる。

フランス：絶対王政と社会の矛盾

『三銃士』を知っているかな？ 舞台は1600年代初め、ブルボン朝2代目の王の時代。かたき役の宰相リシュリューは実在の人物だ。大貴族やユグノーと対決して王権を強め、フランスの利益を図る政策をおし進めた。三十年戦争に介入したのもそのためだ。あとを継いだ宰相マザランは、反対派の反乱を平定して、近代的な行政組織をつくっていった。幼かった3代目ルイ14世が、成人してみずから政治をとりしきる頃には、フランスは体制の整った国になっていた。その政治は、「朕(ちん)は国家なり」という言葉で象徴される絶対王政であった。

ルイ14世は、コルベールという財務官に重商主義的な政策を実施させて、国つまり王の富の充実を図る。周辺諸国に何度も侵略的な戦争をしかけた。対象となったオランダやドイツだけでなく、それぞれの国の利益を考えたヨーロッパ諸国が戦いに参加して、1700年代初めまで続いた。しかし、成功したのは、スペイン王女の妃との間にできた息子をスペイン王にして、スペインの王家

がブルボン朝になったぐらい。ナントの勅令を廃止して、裕福なユグノーは国外に出た。フランスは旧教の国になる。今、太陽王の栄光は壮大なヴェルサイユ宮殿として残されて、観光資源になっている。1700年代中頃まで、フランスの対外戦争は続いた。しかし、フランスの戦争は国土をあまり広げたとは言えず、むしろ国力の無駄づかいだったのだろう。フランスが北米の領地をイギリスに取られたことは、さっき話したとおり。

フランスの絶対王権は、古い身分制度や慣習を残したままである。けれども経済は、オランダやイギリスに遅れをとったとはいえ、それを追って発展した。聖職者と貴族の支配層の下に位置する第3身分の平民から、経済的に成功した人々が力を増していた。ブルジョアジーと呼ばれる彼らは、古い領主制や身分的な特権に不満をいなく。それは、思想の面に現われる。1600年代後半からイギリスで生まれた啓蒙思想がフランスにも広がって、さまざまな議論として展開した。フランスの古い体制を批判して、市民社会を求める思想がきたえられた。だが、絶対王政は、新しい潮流の力をまだ理解できない。

そのほかの諸国の動向

オランダは、イギリスと三度の戦争をした頃から、全盛期を過ぎる。首長がイギリス王になると、イギリスとの争いはしばらくなくなった。それでも1700年代前半まで、オランダは世界システムの中心であり、お金の出入りする金融の中心であった。

ドイツの東部では、まだ領土獲得の戦争が続く。オーストリアが、1683年のオスマン帝国によるウィーン包囲をしのいで、反対に領土を奪っていく。王としてハンガリーを支配し、南のクロアチアやスロベニアを支配下におさめた。さらにイタリアに領土を獲得した。しかし、北に強敵プロイセンが登場する。

ドイツ東北部の領邦国家ブランデンブルクを領有するホーエンツォルレン家は、その東のドイツ騎士団領の首長になった。東側の地域はプロイセン公国に発展するが、そこは神聖ローマ帝国の境界の外にある。1701年、オーストリアのハプスブルク家はまだ名目的な神聖ローマ皇帝だったが、プロイセンが王国と称することを認めた。ブランデンブルクも含むプロイセン王国は、1700年代中頃フリードリヒ2世が登場すると、先進の西ヨーロッパから学んで、国を強大にすることに励む。「君主は国家第一のしもべ」と言って、啓蒙的な君主であった。けれどもその政治は専制的である。穀倉地域のプロイセンには、農民を強く支配する土地貴族がいて、のちのちまでプロイセン王国の政治体制を支えることになる。戦争をしかけてオーストリアから領地を切り取り、しっかりした国の体制のなかったポーランドの西部地域を奪った。ドイツの東北部に軍事的に強い国ができた。

オーストリアもプロイセンも、フランスよりも経済的・社会的に遅れているけれども、遅れた東ヨーロッパで優位に立って、拡大していったのだ。

もっと遅れていたロシアは、1600年代に王朝が交代した。1600年代末に登場したピョートル1世は、西ヨーロッパから新しい制度や技術を取り入れ、国力の増強に努める。彼は、250名の使節団をひきいてオランダ・イギリスに行った。オランダでは、身分を隠してみずから造船所で働いたそうだ。本気だったことが分かる。海への出口を求めて戦争をする。そのころ強かったスウェーデンと戦って、バルト海への出口を獲得し、沿岸部に領土を広げていく。そこに自分の名をつけたペテルブルクという都市を建設した。1500年代の末からロシアは東に向かって領土を広げていたが、ピョートル1世の時代に、ユーラシア大陸の東の果てを越えて探検した。ベーリング海峡というのはその隊長の名からきている。

ロシアは、二度の条約で中国の清との国境線を引いて、シベリアに広大な領土を得た。1700年代後半には、ドイツから王に嫁いだ人が女王になる事件が起きる。王の反対派に支援されてクー・デターを起こしたのだ。彼女は、啓蒙専制君主として領土を拡張する。1770年代から、プロイセンのフリードリヒ2世と、ポーランドを分割していく。南では、オスマン帝国から黒海の北岸とクリミア半島の支配圏を奪った。ロシアが、東の大国として、ヨーロッパ諸国の勢力争いに加わるようになる。

ニュー・イングランド

1620年、イギリスで迫害された約100人のピューリタンが、北アメリカの東海岸へ移住した。その後、その周

辺に多くのピューリタンが植民し、ほかの人たちも加えて最初のイギリス人社会ができた。ニュー・イングランドという。北米東部にはオランダ・フランスの人々も住んだけれど、イギリスがそれらの地域を自国の領地にしたことはさっき話した。イギリス人たちの社会は広がり、古いしがらみから自由な共同体ができていく。1700年代、特に大西洋沿岸地域には、人口の多い地域がいくつもでき、イギリス本国のようなやり方の行政区域になる。しかし、この話の裏側には、追いはらわれた先住民の悲惨があったことを忘れてはならない。

近世ヨーロッパの成果

人間の知性は進歩しているのだろうか。この時代、考え深い人たちが現われて、広い分野で活躍した。

1600年代初めからの進展を見てみよう。イギリスのF. ベーコンは、自然に対し受動的にあるのではなく、観察と経験に基づいて世界を解明すれば、諸学問を革新できるだろう、と提唱した。フランスでは、R. デカルトが、理性によって合理的に思考する道を開拓した。近代哲学の先駆けとされている。『方法序説』などを書くかわら、科学にも取り組んだ。学校で習う直交座標は、デカルトが、幾何学を代数的に考えるためにあみだしたのだ。フランスにはB. パスカルも出た。随想集『パンセ』にある「人間は考える葦である」という言葉は、彼が深くキリスト教に帰依していたことに根ざす。流体の圧力について「パスカルの原理」を習ったね。哲学者B. スピノザは、

イベリア半島から追われて自由なオランダに来たユダヤ人の子孫だ。キリスト教徒でなく、ユダヤ教徒の社会からも締め出された人の考察は、普遍的な倫理学に向かった。主著『エチカ』は、幾何学のように、いくつもの定理の形で書き進められている。ドイツでは、G. ライプニッツが、今名の上がった人たちの考えをおし進めて、統合的な哲学を建設しようとした。微分・積分の発明者の地位をニュートンと争ったけれど、君たちの習う表記法は彼のものだ。経験を重んじるイギリスでは、D. ヒュームなどの経験論哲学が生まれた。これらの思考は、今も議論されるほど豊かな思索の種を含んでいる。

哲学的に考えながら、狭い意味の哲学を出て、社会科学の基礎を築いた人たちがいる。T. ホッブズは、革命期のイギリスを見て、人間の社会にどのようにして政治権力が生まれるかを考えた。主著『リヴァイアサン』の題名は、政治権力をイメージしたのだろう、怪物の名から来ている。同じイギリスの J. ロックは、人間の認識について考えた経験論哲学者の一人だけれど、政治を論じて『市民政府論』を書いた。政治権力を制限することを説き、後世に影響を与えた。1700 年代になると、フランスに多才な人々が現われる。『法の精神』を著わした C.L. モンテスキューは、古今東西の歴史を材料にして、法と社会を広く考察した。権力の集中を防ぐために、立法・行政・司法の三権を分立することを説いている。ペンネームがヴォルテールという人は、『哲学書簡』でフラン

スの政治・宗教などを批判し、弾圧されて文学作品も書いた。スイスから放浪しフランスで思想家になった J.J. ルソーは、『社会契約論』などで、人間の社会がどのようにしてつくられているかを考えた。やはり文学的な作品も書いている。ヴォルテールやルソーは、D. ディドロ、J. ダランベールたちと、『百科全書』をつくるという事業を企画した。時代が達成した知識・技術を集大成して、古い考え方を脱しようとしたのだ。ダランベールは物理学にも登場するよ。フランスの啓蒙思想を代表するこれらの人々の思想上での前進が、フランスの次の時代を準備することになる。経済を考える人も出た。産業革命へ向かう 1700 年代後半のイギリスで、アダム・スミスが、経済を道徳哲学とむすびつけて考え、『諸国民の富』を書いた。古典派経済学の祖と言われている。

すでに 1600 年代のヨーロッパで、郵便制度が生まれ、ニュースを冊子にして新聞を発行することもおこなわれるようになっていた。それは、世の中の多くの人に情報と新しい考え方を共有させる。

自然科学も前進した。1600 年代後半のイギリスに I. ニュートンが現われて、力学をうち立て、重力を発見してケプラーの三つの法則を証明する。単純化して言えば、ガリレイとニュートンによって近代科学が始まった。物理学は、実験をして自然を観測し、観測結果を数理的に表現して法則にまとめる方法によって、自然科学のお手本になる。ニュートンのライヴァルだったオランダの C.

ホイヘンスも、波動の理論など広く研究した。1700 年代後半、フランスの A.L. ラヴォワジエが、化学を前進させて、質量不変の法則を発見した。酸素・窒素・二酸化炭素などを識別し、化合物という考えに至る。ほかの分野も開拓されていった。ニュートンよりも前のイギリスで、W. ハーヴェーという人が、血液は心臓を出て循環することを見出した。そんなことも 1600 年代になって分かったのだ。1700 年代、自然を観察して整理する博物学が進展する。スウェーデンの C. リンネは、近代植物学を切り開いた。これらの人たちは、それまでになかった新しい見方・考え方を開拓したのだ。

近代科学がヨーロッパで始まったということは、世界史の上でとても重要なことだ。科学的な考え方が、ヨーロッパを、ほかの地域に先駆けて前進させる。

文学のことも見てみよう。イギリスの革命時代のピューリタンだった J. ミルトンは、『失樂園』を書いて、イギリス一の叙事詩人とされている。「旧約聖書」のアダムとイヴの物語をたいへん長い詩に表現した。1700 年代に入ったイギリスで、海外への航海を題材にした小説が書かれた。J. スウィフトの『ガリヴァー旅行記』は、子供向けの絵本になっているけれど、人間の欠陥を鋭く批判した大人向けの書物だ。1600 年代のフランスで受け入れられた戯曲は、うまく説明できないけれど、イギリスと違うフランス流のものだ。喜劇を書いたモリエールと悲劇を書いた J. ラシーヌをあげておこう。

こんどは、おじいさんといっしょに、ヨーロッパ近世の芸術のことを勉強しよう。1600年代からのヨーロッパの発展が、ルネサンスとは違う新しい芸術的潮流をつくりだした。バロック芸術と呼ばれている。代表的な建築のヴェルサイユ宮殿の写真を見れば、どんなものか感じが分かるね。スペインを代表するD. ベラスケスやネーデルラントのP. ルーベンスの絵は、表現力がずいぶん進んだことを教える。レンブラント・ファン・レインは、オランダの進歩を象徴するような絵を描いた。何枚もの自画像は、人間の奥深くまで見つめて人間性を表現している。同じくオランダのJ. フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」は、今大人気だけど、「モナ・リザ」よりも生き生きしているね。時代は美術にも表われる。

1700年代に、新しい作風のロココ美術が登場する。フランスで始まったというのがうなずけるけど、時代が変化して優美なものが好まれるようになったのだ。建物の代表は、オーストリアの女王時代に完成したシェーンブルン宮殿だ。写真を探して見てみよう。遅れて進展したフランスの絵画はロココ美術に属す。

ヨーロッパの音楽は、まずイタリアで発展した。近世後期になるとドイツで花開く。J.S. バッハやG. ヘンデル、また、近代にさしかかるF. ハイドンやW. モーツァルトの曲は、今も音楽会で演奏される。ヨーロッパ音楽のハーモニーは、日本の音楽にないものだ。クラシックと呼ばれる音楽に耳をすませば、心に響くものがある。

B. 西南アジアの苦境

オスマン帝国のその後

オスマン帝国は、時代に見合った内実をつくりながら発展し、中心領域ではそれ以前の遊牧民による支配とは違っていた。それでもしだいに、勢いよく成長を始めたヨーロッパに遅れをとっていることが明らかになり、ヨーロッパを追いかける局面になった。

バルカン半島の北で、オーストリアとの対立は長く続いていた。1683 年、オスマン帝国はまたウィーンを包囲したが成功せず、ヨーロッパ人に置きみやげのコーヒーを残して退却する。オーストリアとその同盟者に対して、16 年間の戦争が始まった。結局、オスマン帝国は敗れ、ハンガリーを失って国境が後退する。

改革の必要を悟ったオスマン帝国は、ヨーロッパに対する戦争政策をやめて、先進のヨーロッパの技術や文化を取り入れることにする。美しいチューリップはトルコの原産だけれど、逆輸入されて喜ばれたので、その時代をチューリップ時代という。それも長続きはしない。政治的な混乱があり、1700 年代後半にはロシアの侵略を防ぐことができず、黒海北岸・クリミア半島の支配権を失う。この間もその後も、オスマン帝国の困難が続く。国内の政治構造の変化もある。それなりに経済は進展していたけれども、体制を強化することはできなかった。それでも、バルカン半島での後退を別にすれば、西アジアと北アフリカの支配はまだ維持された。

ムガル帝国の分解とイギリスの侵略

ムガル帝国は、1600年代終わり頃、インド中央部のデカン高原を平定し、支配する領土は最大になった。しかし1700年代に入ると、一度倒されたマラータ王家が再興され、有力諸侯と同盟して、デカン高原に勢力を広げた。マラータ同盟という。マラータ同盟の支配地域はさらにインドの中央部全体に広がったが、1700年代中頃、同盟はまとまりを失い諸国が競争する状態になる。ヒンドゥー教徒の領主たちの国々である。マラータ同盟によって切り離されたインド南部も自立的な国々になる。小さな直轄領をもつに過ぎないムガル帝国に、かつての支配力はない。すでにヨーロッパ諸国が来ているのに、インドは分裂して危険な状態におちいった。

スリランカは、1600年代中頃、ポルトガルからオランダの手に移っていた。1700年代中頃、イギリスが、インドの分裂状態につけこんで、領土獲得に乗り出す。まず、ガンジス川下流域のベンガルで、フランスの応援する領主と戦った。東インド会社の軍は、少ない兵力を現地人の雇い兵で補い、まとまっていなかったベンガル領主側に勝利する。そして、東インド会社は租税の徴収権を獲得した。ムガル帝国の皇帝はその一部をもらい、広いベンガル地域がイギリスの領地になる。イギリスは、豊かな国土に住んでいる住民の富を奪いとる“植民地”経営へ進み始める。それは、長い文明の歴史を重ねたインドの不幸のはじまりであった。

7.2 中国と日本の近世

A. 中国の近世後期

清の成立

1644 年、反乱軍をひきいて北京に入城した李自成は、前年に国名と元号を決めて王を名乗っていた。いよいよ皇帝に登る儀式をとりおこなうばかりである。東北を守る明の將軍呉三桂には、異民族の清を防ぐようにと命じる使者を送ってある。なにしろ、北京にいた呉三桂の父や家族を人質にとっている。

明が万里の長城を修築したことはすでに話した。その長城が渤海(ほっかい)に行きつく場所には、山海関という関門がある。その外側には強固な城塞が築かれていて、清は突破できずにいた。北京が落ち皇帝が死んで、清軍も動きだす。そこを守る呉三桂は岐路に立たされた。

李自成に届いた返事は、清軍と呉三桂の軍が攻め上ってくるというものだった。すぐに迎え撃ったが、あっけなく敗れる。李自成は、40 日滞在した北京から逃げた。

清は、漢人が女真と呼んでいた人々の建てた国である。華北に進出した金が元にほろぼされたとき、故郷である東北部周辺には女真の社会が残っていた。明の時代には、十数の部族に分かれて明に服属していた。明との交易がさかんになると、社会に変化が起きたらしい。明朝の支配が動揺する頃、女真族のあいだに戦乱が起きた。やが

ですべての部族を支配するようになった人物をヌルハチという。姓はアイシンギョロ、漢字で表わすと愛新覺羅。ヌルハチは自立して国名を後金とした。国号を立てるのは明に対する反乱である。明朝は軍を派遣したが敗れた。しだいに平野部を制圧し、都を瀋陽に移す。後金は、人口で何倍もいる漢人を支配下に置く国になる。次の代に、元の皇帝のシンボルである印章を手に入れると、国号を清に改めた。民族の名を満州と称するようになる。

中国に行くと、色と形の違う八本の旗が立っていることがあるけれど、満州族の軍隊が八つの軍団(八旗)に分けられていたことに関係する。騎兵とそれに従う従士などで組織されていた。八旗は、政治と社会を組織する単位でもあった。

北京に入城した清軍は、まだ少年の皇帝をその地へ迎える。中国に移住した満州族の八旗は、およそ 20 万人。その下にあった 3 倍以上の漢人部隊が、地方の治安を受けもったそう。明朝の皇族が南京で皇帝に立ったのを倒す。今回は南朝ができなかった。18 年がかりで反対勢力を平定していく。1660 年頃、中国統一を果たした。清王朝は、征服王朝として、自分たちの風俗を漢人社会に強要する。頭の前の方をそって組んだ髪をうしろに垂らす辮髪(べんぱつ)がそう。チャイナドレスというのがあるけれど、それ以前の中国人のファッションとは違う。

満州族を支配する組織とは別に、漢人社会を支配する機構はおおよそ明になった。内閣ほかの官庁が置かれ、

官僚を科挙で選んだ。漢人の支配には工夫をこらした。長官以下の上級官僚には、満州族と漢人を同数任命した。東北部の満州は特別な行政区画とし、中国本土を 18 省に分けた。これが現代中国の省の原型である。モンゴルは藩部と呼んで、その社会の支配者を通じて間接的に支配した。中国を直接統治するのとは違う。のちに征服したチベットなどの地域も藩部としたので、もともとあった社会の構造が残される。満州の諸部族を統合した清には有力者の会議があって、そこが軍事を決めた。満州文字を新たに作り、満州語と中国語の両方を使用する。北京の紫禁城の建物には、その名を満州文字と漢字とで並べて書いた額がかかっている。いつかそれを見に行けるといいね。

清の最盛期

清帝国は中世的なやり方で成立したけれども、中国にとっての幸いは、ヨーロッパが近世後期を迎えた時期に勢いがあったことである。1600 年代後期から名君が 3 代続き、1700 年代後半まで最盛期だった。

第 4 代を康熙(こうき)帝という。清帝国成立の事情から、親と家族を殺されても清についた呉三桂と、ほかに明の武将出身の二つの家とが、大きな領地をもらっていた。康熙帝は、これら三つの大領主をほろぼす。その頃、鄭(てい)成功という人物が台湾をオランダから奪って支配していたが、それを降伏させて台湾を領土にした。鄭成功の父は密貿易者(倭寇)から明の武将になった人。母は日本人

で、平戸で生まれた。近松門左衛門の大当たりをとった人形劇『国姓爺(こくせんや)合戦』の主人公である。

康熙帝は、税制を改め、人頭税を土地税にくりこんで銀で徴収することに一本化した。人頭税をのがれるために戸籍簿に登録しない者がたくさんいたのが、届け出るようになって登録人口が増えた。

ロシアが進出したシベリア東部は、満州族の故郷に接している。清が攻勢を見せたことから、ピョートル1世のロシアは和議をむすぶ。ネルチンスク条約という。交渉にのぞむ清朝側には、イエズス会の宣教師がついていたそう。清とロシアのあいだに国境線が引かれて、交易することになった。さらに、外モンゴルとチベットを藩部として服属させる。康熙帝の治世は、1722年まで60年間に及ぶ。

次の雍正(ようせい)帝のとき、ロシアとモンゴルの北の国境を画定するキャフタ条約をむすぶ。今の青海省も藩部に加える。内閣を、軍事も行政もあつかう軍機処という組織に変更して、皇帝の下に置いた。それは、満州族の有力者会議から軍事権を取りあげるためでもあった。

次は乾隆(けんりゅう)帝という。その頃、今の新疆(しんきょう)ウィグル自治区を中心に、モンゴル系のジュンガルが遊牧民の帝国を築いていた。明の大砲と鉄砲に苦しめられた清軍も、今はそれらの武器をもっている。古い遊牧民帝国は太刀打ちできない。乾隆帝は、ジュンガルをほろぼして、バルハシ湖までの東トルキスタンを支配下に

入れる。新しく支配下に入った土地という意味の新疆と名づけ、藩部とした。歴史上最大の中華帝国ができた。のちに西部と北部をロシアに切り取られたが、清をひき継ぐ現代中国は、歴代の王朝にくらべても大きな領土をもつことになる。

清の社会

中国文化を好み、有能で勤勉な皇帝が3代続いて、まずは成功した統治であった。大きな戦争のなかった時代、政府の財政にはゆとりができた。何度か全国の税を免除したことが、皇帝の自慢の種であった。しかし、乾隆帝のときの征服戦争で、実際には清朝の蓄えはなくなっていった。税をとるとき官吏が余分に徴収して着服するなど、腐敗もあったようだ。

清代の社会と経済は、明代と質的に異なるものにはなかった。長江中流域が米の生産の中心地域である。茶・綿・生糸などの商品作物と、綿織物・絹織物などの手工業製品は、長江下流域が中心的な生産地だったが、綿織物の生産は広い地域でおこなわれるようになった。陶磁器の生産もやはりさかんで輸出された。手工業生産と並んで、商業も発展した。貸付や預金のような業務をおこなう商人もあった。現金(銀)でなく為替(かわせ)を送るしくみもあった。全体として、商工業はゆるやかに発展したといえる。それらで成功した人々は、同業組合をつくり、会館などの施設も建てた。規模の大きい手工業もみられたけれども、ヨーロッパほどのマニファクチュア

が発展することはなかった。

さっき話したように、登録人口が実態に近くなった。それによれば、1700年代中頃、中国の人口は2億人を超えた。体制がゆるまなければ大国である。

清も、政治体制を強化する考え方として宋学(朱子学)を重んじた。しかし清代には、古典をよく吟味して研究するようになり、ものごとを実証的に論じる考証学となった。知性の進歩を認めることができる。ところで皇帝たちは、明の皇帝にならって大部の書物を出版した。康熙帝は4万7千字もの漢字を集めた『康熙字典』をつくらせ、康熙帝と雍正帝の代に百科事典『古今圖書集成』を、乾隆帝も古今の書物を『四庫全書』として再版した。書物の保全という意味は大きいけれど、中華帝国の皇帝にとって治世を飾るものだったのだろう。

比較的安定した社会で多くの小説が書かれた。曹雪芹(そうせつきん)という人の『紅樓夢』は、初めから読者に受けるように筋書きを検討して書かれた。今読んでもおもしろく、中国人に好まれている。日本の『源氏物語』に相当するけれど、この頃の中国語はまだ心理描写ががてで、ストーリーの展開で語る小説だ。伝統の漢詩は、飽和に達したのか、以前ほどの作品は生まれなくなった。

現代からふりかえれば、海外、特にヨーロッパとの関係は重要な問題だった。だが清も、明と同じように海禁政策をとり、初め広州・マカオ・上海などで管理貿易を

おこなわせた。1700年代中頃には、ヨーロッパ人の来航を広州に限ることにする。こうして海外との交易を制限したことが、中国経済の発展をおさえたと考えられる。人の海外渡航も禁止された。それでも、しだいに、人口増加の圧力が中国人を東南アジアへ押し出す。

文化の面では、初期にはヨーロッパから多くの知識がとり入れられた。宣教師たちの方も、中国文化の高度さに感心し、それをヨーロッパに紹介した。宋学がヨーロッパの啓蒙思想に影響を与えたことは、もう話したね。イエズス会の宣教師たちは、中国の文化を尊重し、伝統の習慣に妥協的な態度で活動した。ところが、ほかの修道会がそのやり方を批判して典礼についてローマ教会で論争になると、清は、イエズス会以外の宣教師の活動を禁止した。やがて、キリスト教の布教を禁じて、宣教師はマカオに追放された。

結局、近世の中国に、ヨーロッパに対抗できるほどの経済活動は生まれなかった。社会の生みだした成果が、同時代のヨーロッパと比較すれば、見劣りすることを認めざるをえない。専制的な政治体制とそれが支配する不自由な社会がはばんだのだろうか。農地と農民の支配を基礎に置く社会から抜け出することはなかった。日本も、今から話すように、こういった反省をまねがれることはできない。

B. 日本の近世

君たちの日常生活と、なにげなくする行動のパターンは、この国の古くからの歴史に影響を受けている。特に前代の江戸時代の社会習慣や文化は、今のわたしたちの社会の底に息づいている。日本の近世を見ていくことで、わたしたちの素性を考えてみよう。

中央と地方の政治体制、社会の統制

幕藩体制は、たいへん整理された封建体制であった。徳川幕府は、大名を徳川家に対する親しさで区別した。分家の御三家、徳川(松平)一族の大名、関が原の戦い以前から臣従した譜代大名、そして、関が原後に服従した外様(とさま)大名がいる。およそ1万石以上の者を大名と呼び、約270家あった。全国はこまかく分けて支配され、多くの地方政府があったのだ。ただし、一国以上を領有する大藩がかなりあって、大名の数にはその分家も含まれている。将軍家は多数の旗本・御家人を、大名も多くの家臣をかかえていた。さらに、旗本・大名家の重臣・高位の公家には家来がいた。武士の下に足軽などがいる。

将軍家の経済的な基盤には、天領と呼ばれるとても大きな領地がある。旗本を代官として派遣して支配した。代官所の人数は大名の家臣に比べればはるかに少なく、その意味で能率的に年貢を集めていた。また、幕府は、大阪や長崎などの重要な商業都市と、佐渡金山・石見银山・足尾銅山などの直轄領から収入を得た。

徳川家でも大名家でも、武将として戦いに参加した人々が、戦争がなくなると、政治的な決定の相談に加わった。戦列での序列がそのまま官僚としての序列になる。徳川家では武将が譜代大名に取りたてられ、大名家では武将が家老などの地位についた。以前は軍人であった武士が、藩政で役目をもつ役人になる。行政のためにしては家臣が多すぎたから、実質的な役目のない家臣もいた。家々の格は世襲制によって固定され、分配される年貢米と就任できる役職は、基本的に世襲の家格によって決まっていた。この点が、中国と大きく違うところだ。

前章で大名や旗本が序列づけられていたことに触れたが、諸大名と旗本が江戸城に行くと、部屋や席順が決まっていた。各藩でも同じような格差づけがあった。大名や旗本は、供の人数などまで気にして格式を保たねばならず、それ以下の武士はこまかい行動規則に従った。今から考えれば窮屈な身分制度だった。だから、福沢諭吉は「門閥制度は親のかたき」と言ったのだ。君たちは彼のように開明的にふるまっていと思うけれど、残念ながら、今も社会に上下関係に敏感な雰囲気が残っている。

幕府には、将軍の相談役として数人の老中(ろうじゅう)がいたが、ときどき大老と呼ぶ一段上の役職がおかれた。大老・老中と補佐役の若年寄は、譜代大名から選ばれた。実質的に彼らが重要な政治的決定をおこなうようになる。中国の内閣に似せて幕閣という。ただし、政治機構ができあがってからも、将軍の側近の者がしばしば強い力を

もった。大臣役の老中と若年寄の下には官僚制度が整えられ、上級官僚には譜代大名か旗本になった。この制度では、相談を受ける者や実務者の役割が重要だったろう。

将軍の下のお中たち、藩主の下のお老たちは、合議制で政治をおこなった。決定すべきことがあると、情報や資料を集め、関係者の意見が述べられ、最後に重臣たちが決定する。その過程は内々に進み、決定されたことが、上意下達のおやり方でおおやけにされる。広く公開で議論はおこなわれない。決定されたことへの批判は歓迎されない。君たちには、現代の日本のことのように聞こえるだろう。そう、この合議制は今日の社会にまで根強く残っている。ここから、どのように合議制を進化させて民主主義を育てればよいだろうか、考えてくれたまえ。

江戸時代の法令は、近代のように整理されたものではない。武家に対して「武家諸法度」、朝廷と公家に対しては「禁中並びに公家諸法度」で、こまかく行動を規制した。庶民に対しては、幕府や藩は「おふれ書」を出して統制した。公家を統制する所司代が京都にあったが、武家のための独立した司法機関はなく、重臣が判断する。寺社や庶民に対して、奉行所が司法も合わせて行政を受けもった。政治は、文書に書いておこなわれ、記録が残された。日本で、たぶん中国でも、大量の文書を保存し、何か判断するとき前例を重んじるという伝統がある。今でも、役人はその習慣に染まっている。地方行政に関する文書は、村々に送られて、回覧し記録した。村では、名主や庄屋などの裕福な人々が、村役人として行政の末

端をになう。彼らは、読み書きができて、文書に対応することができた。

それぞれの村は、名主や庄屋などが責任者になって、連帯して年貢を負担する。そういうこともあって、村の社会は、たいへん関係の深い、他方で自由の少ない社会であった。ただ、小農中心の村になってからは、村の大事なことは集まって合議制で決めた。ずいぶんのんびりと、反対意見がなくなるまで何度も寄り合いをしたところもあったそうだ。村落共同体を自治的に運営したのだ。村には、入会地(いりあいち)などの共有地があった。寺社を建て、共同の作業場を使い、入会地の草木を肥料や燃料にした。おじいさんの暮らしているこの「浦」には、そのなごりの土地が集落の共有財産として残っている。

宗門人別帳というのが、民衆を管理する一つの方策となった。もともとキリシタンでないことを寺に証明してもらうためだったが、すべての人々がどこかの寺に属する檀家(だんか)制度になった。それは、民衆の戸籍登録の働きを果たす。今もほとんどの日本人がどこかの寺の檀家になっているね。寺には過去帳というのがあるから、君たちが先祖の名を知りたかったらそれを調べればよい。寺の方は、いくつもある宗派の本山ごとの系列に組み入れられた。こちらも統制できるようになっているのだ。檀家制度は寺の経営を安定させた反面で、日本の宗教の深みを失わせた、と言うと言い過ぎだろうか。

近世の社会と経済

もう少し近世の社会を見ておこう。村々には、兵農分離によって農民身分になった家など、多くの田畑をもち規模の大きな農業経営をおこなう上層の人々がいた。そういう人々が、名主や庄屋などの村役人になったのだ。しかし他方で、もとの自営農民に加えて、大家族から分家したり、下人が家を構えたりすることが進み、村の人々の多数が小農民という状態に進んだ。

江戸時代前期には、農地の開拓が進み耕地面積が増え、肥料を使って生産性も上がった。それが、小農中心の村社会を生みだすことを助けただろう。幕府や藩にとっても、それは年貢の増収に都合のよいことであつた。農村の生産高は増えて、人口も増加した。1700年頃の全国の人口は、およそ2800万人と推定されている。100年間で1000万人規模の増加だったと考えられている。太閤検地のとき全国で1850万石だった石高が、1700年頃にはおよそ2650万石に増えた。ちなみに、一人が1年暮らすのにほぼ1石の米が要るとされていた。

一定比率の年貢を納めた農民は、基本的に自給自足の生活をするのだけれど、当然さまざまな生活用品が必要になる。農村にはそれらを生産する人々がいたのである。田畑を耕す農民で副業的に従事する者もいれば、専門的な者もいた。村と区別して浦と呼ぶことのあつた漁村は、半農半漁である。そこには、海運業などの事業を営む者もいた。だから、百姓というと農民と考えがちだけれど、百姓はさまざまな仕事をしていたのだ。以前まで農村に

は、職業によって麴屋(こうじゃ)などと呼ぶ屋号があった。鍛冶屋のような仕事は専業で、あいまに米や野菜をつくっていたのだろう。もちろん、米を生産しない者もいた。市の立つ大きな集落にも専門的な商人がいただろう。

時代とともに、綿や菜種油をはじめとして商品作物の栽培がさかんになった。かいこを飼う養蚕業などもおこなわれる。近代の唱歌で「桑の実を小かごに摘んだ…」と歌われる情景は、江戸時代からあったのだ。綿織物・絹織物など各種の生産物の特産地も形成されるようになる。漁村から魚を肥料として出荷するようになった。手工業も発展し、労働者を雇うほどの経営者も現われる。城下町や街道筋の町には、商業・手工業・農産物加工業などに従事する人々が集まり、経済活動が活発になる。幕府は、金貨(小判)や銀貨や銅銭を発行した。金融業や運送業も発展した。日本でも為替(かわせ)で送金した。町人という言葉は、もともと表通りに店をもつような商人や、落語に出てくる土地もちの大家などを指す。借家住まいで小さな店を営業する者や行商人は、その下に位置づけられていた。

大阪は、天下の台所といわれて物産の集まる場所だった。時が経つと、江戸も大きな都市に発展した。年貢として集められた米の多くが、そこでお金に替えられる。こうして、時代劇で見るように、大きな都市では、日常生活で錢(ぜに)を使い、物を担保に質屋からお金を借りる、というような生活が生まれてくる。年号を使って元禄時

代と呼ばれる 1700 年前後、時代は一つの頂点を迎えた。幕府の政治も、文をもってする文治政治に変わっていた。第 6・7 代将軍のとき、浪人からすぐれた儒学者になった新井白石は、将軍の学問の師という低い身分で、幕府の政治に関与した。ただし、名門の老中たちから憎まれた。

日本人は工作が得意なのに、馬車や水車を使う製材機などを開発せず、産業技術でヨーロッパに遅れをとっている。総合的な文明の力の弱さだろう。でも、とても長く戦争のない時代が続く。人々は、豊かではないとしても、平和な社会で生活していた。日本とヨーロッパに暮らした人々は、どちらが幸福だったのだろうか。

江戸時代前半の文化

1700 年代初期まで、文化の中心は京都・大阪にあった。平和な社会で、町人たちに勢いのあった時代、現実社会にむすびついた文化が花開いた。元禄文化と呼ばれる。俳句を一つの文学に高めた松尾芭蕉がいる。交流が広がって地方へ旅をし、俳句のある紀行文『奥の細道』ができた。井原西鶴は、俳諧師(はいかいし)でもある多才な作家で、大阪の町人を描く小説を書いた。近松門左衛門は、やはり町人の暮らしを素材に人形浄瑠璃の戯曲を書いた。彼らは、大名家に仕えない町人的な身分であった。

儒学者として荻生徂徠(おぎゅうそらい)を挙げよう。儒教の古典を重んじて、考証的な方法で考えた。一時期将軍側近の実力者に仕え、政治上の相談を受けたが、塾を開

いて学派を育てた。さつき名の出た新井白石も、その明晰な頭脳を示す書物を書いている。日本でも、中国にならって実用書が刊行された。『大和本草』を貝原益軒が編集し、農業の振興のために『農業全書』がつくられた。また、『大日本史』のような歴史書も書かれる。中納言の位なので中国風に黄門と呼ばれるあの人、水戸藩主の徳川光圀が始めた。その事業は明治まで続き、徳川家である水戸藩に尊皇的な考えを植えつける。

1700年代前半、大阪の町人たちが自前で懷徳堂という学問所を開いた。そこから、富永仲基のようなすぐれた学者が出ている。江戸にも製品を送る醤油製造業者の息子だ。それまでの考えを批判して独創的な『翁の文』・『出定後語』を書いたけれど、若くして亡くなった。懷徳堂の学者たちは、武家の儒学者に勝るとも劣らない。

江戸時代、今の日本人の趣味を決定したような美術や工芸の作品が生み出された。君たちも、それらの絵や漆器や彫金や陶磁器などを美しいと思うだろう。どの作家の名を挙げればよいのか分からないけれど、有名な人に狩野探幽・本阿弥光悦・俵屋宗達・尾形光琳・酒井田柿右衛門などがいる。建築の代表を挙げるとすれば、京都の桂離宮だろうか。全体的な構想のもとで幾何学的に構成される西洋の建築と大きく違う。日本人は、対称性を乱したものを好む。難を言えば全体的な構成を欠く。絵画や建物、身のまわりの洗練された工芸品を見て、その美意識を考えてくれたまえ。

江戸時代の転換期

1707年に富士山が爆発し、火山灰は江戸にも降った。東海道から見て東側の斜面にある少し盛り上がったところが、その時の噴火口だ。繁栄期が終わりつつあった。

1716年、和歌山藩主の徳川吉宗が第8代将軍を継いだ。新将軍は、みずから主導して政治の全般的な改革をおし進めた。その政治を享保(きょうほう)の改革という。行政組織を改め、法令なども整備した。文化政策にも及び、漢訳された西洋の書物の輸入を許し、青木昆陽たちにオランダ語を学習させた。長崎奉行所の通訳以外にもオランダ語を学ぶ者が出て、蘭学が始まるきっかけをつくった。経済面でも、年貢の課税率を増やし、新田の開発を進めるなどして、幕府の収入は一時的に増えた。しかし財政改革は簡単には成功しない。多数の死者の出る大きな飢饉が起きると、米の値段が上がり江戸で商店の打ちこわしが起きる。農村で一揆も起きるようになった。薩摩(さつま)に伝わっていたサツマイモの栽培が奨励されたのはこの頃のことだ。享保の改革は幕府の体制を立て直す一定の成果をあげたが、その引き締め政策によって経済は成長しなくなる。これ以後世界は寒冷期に入り、大きな飢饉もあって、人口はほとんど増えなくなる。

次に、田沼意次(おきつぐ)という人物を中心に、1760年頃から二十数年間、重商主義的な政策をおし進めた。商品の生産と流通を発展させることに努める。そこから税収入を得たり、商品の輸出によって金と銀の海外流出を

減らしたりして、財政の改善を図った。北海道の開発も計画した。しかし、重商政策は農村に影響を与える。小姓(こしょう)から老中にまで出世した田沼意次は、保守的な人々に反発されて失脚する。農地と農民を支配する封建体制とそのイデオロギーが、経済の構造を変えるような改革をはばんだ、と言えるだろうか。